

6月校長講話 要旨

○先週末の豪雨について

先週、6月2日（金）夕方から3日（土）の午前中の豪雨、及びそれに伴う洪水については突然の出来事で予想以上の被害が広がってしまいました。金曜日の真夜中に災害警報等の緊急連絡でスマートフォンが鳴ったお家もあったのではないのでしょうか。学校としては、6月3日は急遽休校にしました。4日、日曜日になっても水が引かない地域もあり、テレビ等の報道がされていない場所でも多くの被害があったのではないかと思います。

もし本校の生徒のご家庭や親戚等の方で被害に遭われた方がいれば心よりお見舞い申し上げます。

○先週はスポーツフェスティバルでした

先週の5月31日（水）、6月1日（木）の2日間、スポーツフェスティバルが実施されました。高校では学年ごとに男女別クラス対抗で様々な球技や種目での対抗戦を行いました。中学校では借り人競争や綱引きなども行いました。運動競技の花はリレーとよくいわれますが、そのことを改めて実感したものでした。それぞれの種目で頑張った皆さんご苦労様でした。

○地域の方からいただいたメールを紹介します

東洋大付属牛久高校様

5月24日（水）の17時30分頃、栄町5丁目歩道橋スロープ下り階段にて、大変立派な行動をされていた生徒さんをお見掛けしましたのでメールをさせていただきました。

下校時と思われる男子生徒2名が、歩道橋を渡り階段を降りようとしていた腰のまがった高齢の女性に話かけ、荷物を持ち、階段を降りる手助けを一生懸命にされていました。その時私は、下の横断歩道を渡っていて、女性が歩道橋の上を通過しているのは分かっていたのですが、かなりスムーズに歩いておられたので、気に止めず「桂不動産」側から「ステーキ宮」側へ渡り切っていました。そこで信号待ちをしていると東洋生男子2名が、そのような行動をしておられる所を見ました。大変立派な行動だと感心したのですが、階段を降り切っても更におばあさんに寄り添い、更に女子生徒さん達も合流し、数名で囲んで対応されていたので驚きました。とても心の優しい生徒さん達でなかなか行動にうつせる事ではありません。日頃から他人を思いやれる心を持った立派な生徒さんだと思います。ご存じの通り、栄町5丁目の信号は学校方面から歩いて来て、歩道橋を渡ろうとすると、その手前には横断歩道と信号がなく、大変危険な場所です。それを認識していて完全に降り切ってもしばらく同行されていたのだと思います。ぜひ、生徒さんを褒めてあげてほしいと思います。…という文面です。

大変素晴らしい行動です。ぜひほかの皆さんも困っている方を見かけたら、「何かお手伝いできることはありませんか」とお声がけして、手助けをするようなことをしてください。

○交通ルールを守ること

先月、5月11日（木）から20日（土）までの10日間、春の全国交通安全運動が実施されました。特に今回は自転車乗車時のヘルメット着用と交通ルールの順守の徹底が中心に実施されましたが、本校生徒の通学、とくに登校時については、本校生徒の人数が多いことから様々なご意見が地域の方

から寄せられています。

交通ルールを守って、道路を歩きましょう。狭い歩道に何人かで並んで歩いていれば、向こうからやってくる人には通行の妨害になります。また、後ろから自転車の人があれば、これも邪魔になります。周りの人に迷惑にならないかよく考えて、行動してください。これは交通ルールを守るだけのことでありません。

今日は交通ルールについてお話をします。道路での左側通行の国はどこでしょうか、日本の他は、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどイギリスの影響下にあった国や、タイなどで少数派になります。近隣では中国、朝鮮半島、台湾の他、ヨーロッパ、アメリカ大陸など大半は右側通行です。

鉄道についていうと、鉄道の発祥がイギリスということもあって、ヨーロッパ大陸の多くも複線の鉄道の場合多くは左側通行です。中国では第2次世界大戦前に、南満州鉄道など日本の都合などで鉄道建設が行われたこともあって、左側通行ですが、道路上を走る路面電車は右側通行です。鉄道も本当は右側通行にしたいのですが、線路の付け替え、車両基地の配線の変更、信号設備等の変更はなかなか難しいので、道路通行とは逆になってしまうようです。鉄道の左右の交通については、調べるのが私自身も十分ではなく、海外の映像を見るときに気を付けているのですが、なかなかわかりづらいつとところがあります。調査している人がいたら、私に教えてください。

日本では古くから左側通行が中心でした。江戸時代に来日した外国人＝オランダ商館に勤めた人＝のいくつかの記録を見てみると、ケンペルの『江戸参府旅行日記』には、「これらの街道は幅広くゆったりとしているので、二つの旅行隊は触れ合うこともなくすれ違うことができる。日本国内の仕来りに従っていうと、上りの、すなわち都に向かって旅する者は道の左側を、下りの、つまり都から遠くへ向かう者は右側を歩かねばならないのであって、こうした習慣は定着して規則となるに至った。」ドイツ人のケンペルがオランダ商館の医師として、1690（元禄3）年から92（元禄5）年に長崎出島に居住し、江戸に参府して、時の将軍5代綱吉に謁見した時の冒頭、最初の記録にあります。

もう一つC・P・ツェンベリーの『江戸参府随記』では、「この国の道路は一年中良好な状態であり、広く、かつ排水用の溝を備えている。……さらにきちんとした秩序や旅人の便宜のために、上りの旅をする者は左側を、下りの旅をする者は右側に行く。つまり旅人がすれ違うさいに、一方がもう一方を不安がらせたり、邪魔したり、または害をあたえたりすることがないように、配慮するまで及んでいるのである。……」、みな規則正しく左側通行をしている。それに比べて、ヨーロッパでは、みな好き勝手に歩いているので、よく人にぶつかってしまう。交通ルールは日本に見習うべきだとツェンベリーは書いています。ツェンベリーも同じくオランダ商館の医師として、1775（安永4）年から翌年まで務めたスウェーデン人で、本来は植物学者です。ツェンベリーが来日した1775（安永4）年は、杉田玄白らによる『解体新書』が出版された翌年で、老中田沼意次の時代です。

今まで聞いていて、長崎のオランダ商館になぜ、ドイツ人やスウェーデン人の医師がいるのかという疑問が浮かぶでしょう。近世ヨーロッパの人々にとって、中国の東方の国、日本は謎の国でした。そのためオランダを通じて日本のことを研究したいと思う学者たちは、ケンペルが始まりで、何人も国籍を偽って、オランダの医師として来日し、記録を残しています。江戸時代は「鎖国」だったから

日本の情報は出ていなかったという、間違った「常識」は捨てましょう。ちなみに「鎖国」という概念・考えは、ドイツに帰国したケンペルの日本研究の書物で『日本誌』の一部を、長崎のオランダ語通事の志筑忠雄が、1801（享和元）年に『鎖国論』と訳したところから始まります。

それはさておき、日本ではなぜ、左側通行になったのかというと、平安時代に生まれた武士の習慣から始まり、鎌倉時代に一般化したようです。多くの人は右利きですから、武士は刀を自分の左側にさします。左側通行であれば、さした刀は反対側からやってくる人にぶつかりません。

また、武士は弓矢を使います。左手に弓を持ち、右手で矢を持ちます。日本の弓は、矢を弓の右の外側に番えるため、自分の正面から左90度までしか矢を打つことができません。

武士がまず弓矢で戦う場合、敵を見つけたら、戦う相手・敵は、自分の左側に置くようにします。逆に自分の右側であれば、弓を放つことはできませんし、戦うことはできません。

こういった武士の弓矢や刀を使うところから日本では、自分の右側を開けて歩く左側通行が一般的になりました。明治時代になって、人力車や馬車が道路を通るようになると、それまでの習慣が、交通規則として左側通行が義務付けられるようになりました。鉄道もイギリスの技術で導入した後、複線化するときには左側通行になりましたが、何の違和感もありませんでした。

こういうことを、難しい言葉で言うと「慣習法の成文化」といいます。「成文化」とは、文字化して文章にして、慣習法の内容を固定化させます。慣習法のわかりやすい例で言うと、日本の首都はどこですか？

日本の法律等で、首都の場所を定めたものはありません。みな常識だと思っているので、東京都が首都であるとわざわざ文章化する必要がないこともあります。

多くの法律は、日常生活の常識的なところから決まってくるものです。ですから、交通ルールも今までの常識的なルールの中で作られているわけですから、そのことを十分理解して、他の人の迷惑にならないよう行動してください。